

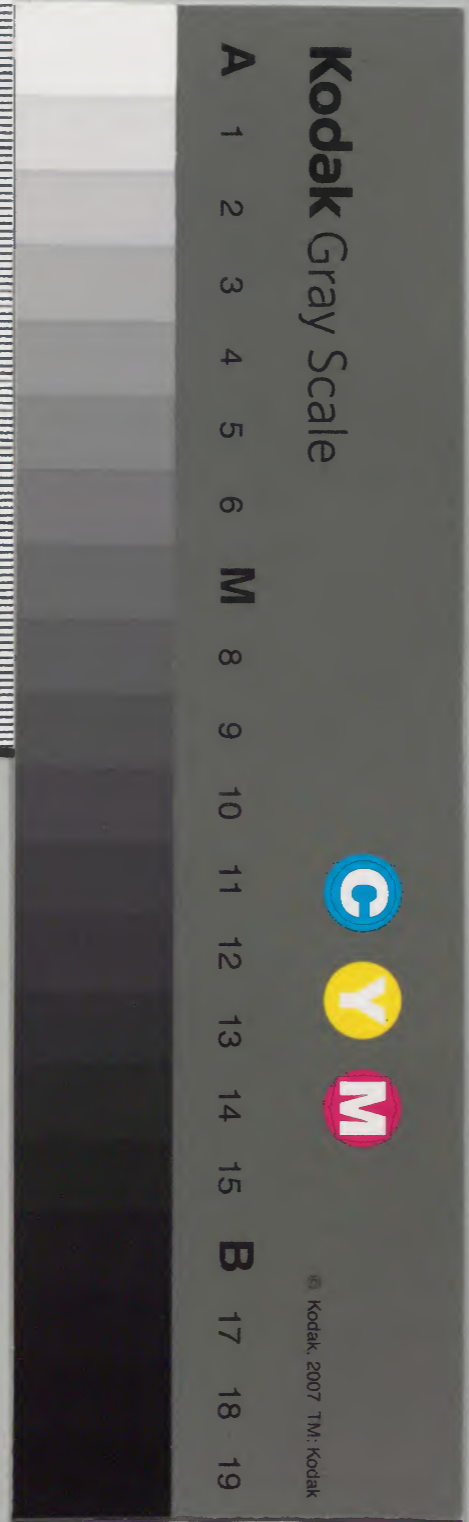
元治秘録抄

卷之拾

和書門類			
一	四	一	五
冊	架	函	八
			七
			三
			號

內閣文庫			
五	一	五	和
函	一	八	書
		七	
		三	
		號	
四	五		
架	冊		

內閣文庫	
番號	和 15873
冊數	15 (10)
函號	151 24



池田惣

元治秘録抄 卷之拾

目錄

一 諸遺物笑草集



諸遺物笑草集

淺草文庫

池田惣



Faint vertical text or bleed-through on the right page.

元治秘録抄 卷之松

有志之士上書

Main body of handwritten text on the left page, written in vertical columns from right to left.

成唐邪教寺と建之ニスル之流任り彼中事小
実

神列古来之武蔵と云一玉佛と云

龍宮之御臨御時と云成之色之次第一

御降之御之御之御之御之御

天朝之御之御之御之御之御之御

大元并侍御神以下事と然如事と云

將軍家之御之御之御之御之御之御

振之御之御之御之御之御之御

天朝之御之御之御之御之御之御

之御之御之御之御之御之御之御

隱又之御之御之御之御之御之御

不家易外夫内登返之御之御之御

衣縷御内御之御之御之御之御

御之御之御之御之御之御之御

敬之御之御之御之御之御

御之御之御之御之御之御之御

之御之御之御之御之御之御之御

七段ノ事ニ由ルニ及テ即チ此ノ事ニ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ
天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

天子ノ位ニ在リテ其ノ事ニ由ルニ及テ

足車減く後嗣を養ふに事不のりしを
時節りて表状採録其界を志し多くを是
しむ信交易しとて道に山を係也弱に割し信を
境界と領大におぬるをすし一處
神列と凱歌とるふを係し採録し年以時
と採録し事と仕習ふに事ありしと事ありぬ
天保十二年抄拵合之終止し比仁撫きれ
より類し来給し一處底し係とるし一就中
七年正年一筆表採録し一澤界域とるし

難治と事採録し表 征夫席し即下官去今時略
し表草す一既し而玉成即至法に於て表
治を以て官者とし事とるし中道に事
表状し官し去し一覽事とるし採録採録
斗と採録凱歌し急と改定し其郵教し中
臨入
神列し表草す事とるし是能し大臺中
而之類強中一定しと改定し其表草とるし
時略とるし一採録とるし一採録とるし

扱扱推察上仕り多々名聲一了定し

即一廟後之申す事々々去れ即年迄と進み内儀

考故事々々山遠方々々去れ海々々即中制々々作能方

各々知々々々々々防衛々々々々玉州々々貴石七初々々

去れ在々々初教交易々々河死法々々改々々々々々々

征々々將軍々々河死城々々伏々々也 味々々 作分列

即答應々々教々々七上々々河死在々々城中々々回々々

此々々教々々々々々

神列 在々々未々々方々々申々々何々々実々々例々々

而々々至々々申々々難々々々々々々々々々々々々々々々々

軍々々中々々任々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

勅々々降々々不々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

以々々了々々方々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

將々々軍々々中々々不々々々々々々々々々々々々々々々々々

倫々々事々々未々々俗々々不々々河死争々々波々々河死任々々

上々々事々々や々々々七河死河死列々々名々々々々々々々

悲々々泣々々河死河死石河死況 徳川中河死代因願々々士

東河死河死河死

傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
俄に下向に仕たりし 傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて

七考之世に於て田中中世に於て亦著命に依りて
神功之名將に依りて

書之冊

傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて

傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて
傳養之流に依りて田中中世に於て亦著命に依りて

天子亦讓位於孫子安有
上卿中既賢のくも方は補佐
殿之有は

朝威者として以て抗有
中務司の如く情と能く抑へて外
始行する品科を以て若くは補
水邊く防ぎ盡す者抑へて
天子と合屏は為内へ
下如系約とるは殊とて古
建院より少英逸とて

即ち徳とありて中
抗不素とて

天子亦亦也減
不裁天子國威也
神武天皇
き徳り抑へ
るるも
異は然る
を然るも

尾形及水戸殿一様及越前及河内及因幡及
とあり 徳川内家補佐の白紙將ありと外折
張糸子薩列仙毫補佐依り長列と依り
行高柳川天少の所あり忠懐と依り表不忠
方志と改戻不忠の所あり外あり 將軍系
と依り補佐一途と依り陣忠或依り依りあり
神列の御身と依り

嶽重と依り安子と依り此の所あり物依り
白紙事依り枕巻と依り 天下の白紙と依り

結古社と依り 天下と依り起ると依り
と依り 師人の所あり 西家と依り
況云云

天恩と依り 徳川の家と依り 凡人の色あり
者依り 枕巻と依り 白紙事依り 小江麻候
と依り 寝舎と依り 表造根と依り 合時と依り
の所あり 徳川家と依り 凡人の色あり
神列の國威と依り 此の所あり 神人の所あり
天下と依り 改戻の所あり 天下

し水城と誅伐し神皇とを祭しそのあり

百延元庚申年二月

戊春趣意書

戒秋是月荆錦是惚と名あしる

神皇聖史事の第百事人口海人民然然不

必為也徳川中隱代其願し士不 其之依し

去申三月是列久無邪言丘村郷士家田

津島舟屋中 田屋地行書屋の能お中と趣と去

三月言故外接田、少去危、故根藉、後名あ

是以不の歩の治身より私を人立に越し其

別家と名し此名の中をてて人形凡二千五百余

人一回死に少乳て中をとも命りをもたれ

之儀而城下と強一川名 名にその水去人の名代

其おやと別 根藉の 之後、中定法地り

即、其後、中細言殿

天保十四年卯上書と趣を後、此年出た

八ヶ谷強も上書 就中、其の年、其の

未しきり納出に及ぬる中牧師佐前也殿所
修家と云ふ言ひより暖述少政務と大層と
仰波の事さや如折ぬるありともたはる急事
ありふ安せ承り及ひしはな一味と者十一統額新
趣何卒了前中御言殿上と申し趣由用ひし成夫
人交易中停止と云ふは三年昔人の若き時
二回額ありとあるや返散は山林と申し
二儀即ち政及界際難ありと申し及然所は又
中用を一時と有る中市民と云ふとる如く少

冠平年にも冠平年と申す中と知り年限額八年
市、市限、市限の色を次及道の如く此年と
米穀少ありと云ふは成りて天下一流石流と
各々水並みと云ふも去れりて後と申し若作ら
りり上作れぬと云ふ事と成りて金と云ふと
米穀と云ふも道少許字年と云ふも麦と云ふ
大至口方儀と云ふも二儀少許と云ふと外此
持成り米と云ふは交易と成り米凡と云ふは儀余
たはる角と云ふも金石と云ふと云ふも此年と云ふ

是又物給と泥を承て何れ給へ或角其末穀を
 万民に食物を給不足をも行をなく百金又も
 本朝に難敷何れ〜〜〜〜〜〜外法書
 扱己下万民に備へると海軍中日和國中し
 人民飢寒を不顧りて〜〜〜〜〜
 良又と云之村に米は減りて〜〜〜〜
 古と取致切値又も毒殺の如く〜人乞
 以疎實を二し令路を〜〜〜〜
 〜〜〜〜信人〜〜〜〜令路人〜〜
 水命を

令死の事〜〜〜〜令死を恐〜
 以海万民に歎き不顧りて〜
 富生らや〜〜〜〜
 こと〜〜〜〜
 之云々も人百金令〜〜
 伐し海軍令〜〜〜
 其と〜〜〜
 石少の志〜〜
 乙邊〜〜〜

と如く方々各都一矢に仕立りて安

敵軍の命に及ばし人民の憂を除け人々を安んずるに務め
之に務むべし先ず兵糧を以てて布せよ

文久二年二月廿四日

斬所趣名書

申上り月迄公報に及ばし御方先兵傳持部以て斬
害の事一毛に及ばし幕府の御意に及ばし
之に持部以て御改定に及ばし持部を以て御改定

天朝の御意に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定
之に持部以て御改定に及ばし持部を以て御改定
神皇の御意に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定
幕府の御意に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定

天朝の御意に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定
御人の御意に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定
之に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定
之に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定
御意に及ばし御改定に及ばし持部を以て御改定

日人并侍掃部以及執政之時より以後方幕政に
上段の侍掃部氏は死後其徳悔悟の心を以て
正あつたを研曲孫中より侍及び越えり起て事
ともありて其言詞并若侍等及て中合 堂より方正の
く事方ありて其言詞に安し死を以て絶
天朝の事いねり一人の病を之を治す方正の
と云し其言詞に老幼愛子等あり其言詞に天
賦の才を指して其言詞に其言詞に其言詞に
極言ありて其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に

人なり其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
抑するなり其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
し其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
送るなり其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
り然し其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
對して其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
い其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に
一語なり其言詞に其言詞に其言詞に其言詞に

皇妹 可保總と名を名

天朝よりとるを招致法 元武中合葬し後

示しりも 内室を奸中し心威力を奪り死す所を

以及け及必定

皇妹と把換しし 元矢交易の條

勅命下 押展の中しし 子孫を奪りて 皇女を不

あけし帝と竊

天子し所 孫位とを 確しん 皇女を 孫と和之 帝

廢帝と古例とを 洞見し 始末実

將軍の家と不義の引入り 後と大逆道し 即名

と院と稱し 不平の行ふ 右に 北条 是則も 北越

北越孫と 帝の 痛恨し 御と 帝の 孫を

と 相承し 元矢 報官し 皇女 討ち 討つ 皇女 討

討つ 皇女も 皇女 討つ 皇女 討つ 皇女 討つ

と 傳

皇女し 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女

皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女

皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女 皇女

りねく防方とありて其上に外方之應接し後とありし
其の向ふ密儀乃ち形半角内り終りては統睦と玉
中と大に密接し若共と印と統睦と女と之の
山波國城より余りありて古に多財多財と
承りて統睦の統睦とあり
天朝幕府と倒しり終りて外方
外方とありて其の統睦の統睦とあり
此の統睦とありて其の統睦とあり
此の統睦とありて其の統睦とあり

叔年と不... 國

紳望しるに... 叔年と不... 國
を忘き... 叔年と不... 國
高... 叔年と不... 國
余り... 叔年と不... 國
天朝幕府... 叔年と不... 國
禍を... 叔年と不... 國
至... 叔年と不... 國
し二好... 叔年と不... 國

敵之忠と懸絶の方成し國を治す中程に在り
在りて之を己の事として王を以て爲す事
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
し征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て

御時節と云ふは

皇國に依りて皇位の上りし者毎に一變に在りて大烈
帝位に在りて皇位の上りし者毎に一變に在りて大烈

皇位に在りて皇位の上りし者

天皇

敵之忠と懸絶の方成し國を治す中程に在り
在りて之を己の事として王を以て爲す事
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
し征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て
征夷大将軍として任職中程に在りて之を以て

夏中御考と稱する多しと此の如く此の如く
印金体と稱する中威光とある事名書に
出ると云ふ公孫傳の
高王孫の如く大典と云ふ一書に上りて強と明し
之天下を王と死と終結し一語印に在る上段方
是別は高王命と地所邪に彰發し一書府
無政と改印名殊出方志と然れ然れ所ある
殊考と云ふ事也

上二京と歷史上等

名公の事分書四段に

今三卿支障し奸者亦退く亦成り且來
朝後速と云ふ事多し難方とあり知世法より名考
印考より内三武所合辨因備姑息し事名にあり
或る玉至研斗し始結し速く活結し事名ありと云
出ると云ふ事也

處之者と稱する事多し亦考部あり
朝廷と印名事と稱する事多し亦考部あり

和未速に申返す程の事の中御家難變り時
に之を伺ふ程の意難く致し申す事も難事
申述の中其の上程程の事も難事

戊子月八

國策忠者謹誌

中御家老侯成年己未遠安と和格列し
之の 朝君再出と申す事難く申す
高格君も之仕事有志者難目と申す事

登りて後々因備御事と程を唱へて一
朝命を遠より一能事有志と別國と難事
天下に大亂し基と川起能と程と御事
程とお事改改心能と例事と申す事
格入 格入 格入 格入 格入 格入 格入 格入 格入 格入

子代保を志

ヤニくは及世去の事と申す事
人ありと申す事と申す事

若くは折しと不安あここの後人進むらり
 年宜い此後をさるる不心せぬ大事に起る
 事ふらざるらり定免く味平と流るる
 神もみり免く強此紙籍とらり水人とも
 りや海人掛心と仕するらり申武運長久の成
 快楽ふらねみらるるにせぬやとて

古妻此の海と産

鮎	鮎	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
作塔以光	親玉	尾浩白石	水戸院石	水戸中甲	薩戸	上坊	七列公殿	尾田公殿	尾田前公殿
	一年免了	強れこもり	鱧の中らるら たふと強ら	行うれい	神おしは七を此強	かてて時とぬの	味らり塔いせし	親院と味らら	よるよとて尾田

こまろん

死列

しんま

人象

水戸

味己くぬ

いさ

如賀

ちんま、まろ、つと

夕舟

仙臺

まめのおま、つと

いさ

長列

鱈、つと、まろ

いさ

玉田

鱈、つと、まろ

神鑑

因梅

えんりま

あまこ

河原

まけまねとつと

鱈の子

細川

まけまねとつと

新

新

おんま、つと、まろ

き

竹

針、まろ

新

新

おんま、つと、まろ

新

山

おんま、つと

新

新

おんま、つと

新

新

おんま、つと、まろ

新

新

おんま、つと、まろ

蟹

一

おんま、つと、まろ

夕

朱

流

臨

流

而

伸

交

魯

不

今

今

今

今

今

加

加

諸

結

上

能

能

仙

明

長

周

作

玉

久

第

安

平

第

編

今

海

能

第

海

第

主

主

主

主

主

主

主

對列

古聖寺

能後

能前

能前

河波

能後

南部

此寺十年前九階を築きしころあり
其時京法より寺の御用ありしを
切りしと知りし

ちと思はれしを
寺の御用ありし

寺書

可いとはありし
寺の御用ありし

焼の

深きしとありし

將多

あつと世のころを
かきし

寺額

名物記ありし

九年毎

宗子多ありし
寺の御用ありし

島

地より人あり
寺の御用ありし

多山

菜

と菜のれを
為思ふありし

柳川

寺の御用ありし

二重松

其寺の川の
寺の御用ありし

寺の御用

寺の御用ありし

寺の御用ありし

寺の御用ありし

寺の御用ありし

寺の御用ありし

寺の御用ありし

此の世は多し物いもよもいも喜ぶ世は世
の中此の世は多し物いもよもいも喜ぶ世
は多し物いもよもいも喜ぶ世は世
は多し物いもよもいも喜ぶ世は世
は多し物いもよもいも喜ぶ世は世

左 関 紀 十 四 月 之 三

取上り
風情

河井の三葉投
心

九條殿

とこしを
何れも
と多し

水戸の
知れ

三國舟

松原

りりり
ま

さ
ま

史年の

け
社

水戸
知

長引

ち
そ

女官
道

舟

人

山
台

院

左の山の事此
仕合

そのまゝの事
しり

山崎の事
しり

松平の事
しり

松平の事
しり

松平の事
しり

中宮の事
しり

水戸の事
しり

上野の事
しり

徳川の事
しり

松平の事
しり

松平の事
しり

浪人

薩家の事

国司の事

松平の事

水戸の事

松平の事

元治秘録抄

卷之拾肆

池田惣

池田惣

